

第 19 回日本ボランティア学習学会第2分科会



1 テーマとねらい

「ボランティア学習からつながる“今”～ボランティア体験をした若者たちが、地域社会でどのように生きているか」

◎高校・大学でボランティア活動への参加を通じて社会との関わりを“学んだ”若者が社会人となり、その後の人生観や社会との関わりについてどう捉えているか。大学3年生がズバリ聞く！

2 コーディネーター及び事例発表者

○コーディネーター

合田 友氏/日本大学芸術学部3年
/東京女学館高校卒業生

○事例発表

甲野綾子氏/NGO SOSIA 代表理事
/亜細亜大学卒業生

長田由夏里氏/カメラマン
/神奈川ふれあいサマーOB

荒井聖輝氏/株ここくらす 社長
/神奈川ふれあいサマーOB

飯田瑞希氏/NPO 法人さいたまユース
サポートネット
/大東文化大学卒業生

3 分科会の概要

第2分科会には、20名の参加者が集まり、中には先生の勧めで参加したという高校生の姿も見られた。

大学生コーディネーターの合田氏による勢いのある進行により、ボランティア体験をした若者たちが、地域社会でどのように生きているのかというテーマに沿って進められた。

甲野氏は、学生時代に自分でできることを探していた。自分で稼いでもいらないお金を募金するのはおかしいと親に言われたが、何かに関心を持つことに意味があるのかもしれないと感じた。亜細亜大学に入学し、新しいことができればいいなど、学生団体の亜細亜大学ボランティアセンターに入った。この活動の中で、ミャンマーにボランティア研修に行き、当時は軍事政権下の現地の人に「あなたには、できる」と言われたことで、自分は日本に生まれ育ち、いろ

いろな選択肢があることに気づき、まずは挑戦してみよう、やってみたい、これだと思ったことはやってみることにした。甲野氏にとって、ボランティアは人生の一部となった。

飯田氏は、大学の講義でネパールでのボランティアの話聞き、参加したいと教員に申し出た。現地の生活の場に入って活動し、文房具を届けた。活動を通して自分のことを振り返り、日本とのギャップを感じた。ボランティアに行った自分が逆に親切に現地の人に助けられた。このことが帰国後に進路を考えるきっかけになった。ボランティアを経験したことで、人とのつながりが広がり、自分自身の学びにつながったことに気づいた。社会に目を向けるきっかけになった。学びたいという意欲、モチベーションになっている。

荒井氏は、神奈川ふれあいサマーのOBで現在は、起業して横浜でエリア再生のリノベーションを進めている。リノベーションの事業もボランティアも共感してくれる仲間がいるということがいい。いろいろな人に協力してもらえし、人が集まってくる。人に支えられている。課題に向き合うということ、社会の課題は何だろうか考えるのは、自分の課題に向き合うことにつながる。ボランティアは、やりながら学ぶ、汗をかくという行動から学びがある。「公私混合」する。公のためでもあるし、自分のためでもある。都市や地域の経営課題を民間主体で解決すること、競争原理から「共創原理」へと変えていく。とにかく、今すぐやりましょう！ボランティアはすぐに始められる。

長田氏も、神奈川ふれあいサマーのOBで現在はプロカメラマンである。10代の若者が集い、ボランティアのサマーキャンプを中高生の実行委員がメインに企画・運営を主体的に行う。長田氏は、中学生のころは教室の隅にいるような性格で、人前で話をするようなタイプではなかったが、この活動を通して変わった。活動の仲間は今でも同窓会をするなど、生涯の友となり、強いつながりになっている。現在は、写真というツールで地域とつながる活動をしており、ママ起業家と一緒に、個々にやりたい夢について写真を通して実現していこうとしている。また、仕事をしながら、小児ホスピス設立の活動にも参加し、カメラマンの仕事もボランティアもすべて子どもたちの笑顔につながっていると話す。

仕事とボランティア、ボランティアとどう向き合うかとの問いに、

甲野氏は、関心を持ったことをその時にやる。時間がどうしてもないときは、お金（寄付）をしようと話す。

荒井氏は、ボランティアという言葉は使わないようにしていると話す。

ボランティアとは何？という問いに、
飯田氏は、結果的に自分が変わる。視野が広がる。自分の学びになるものと話す。

荒井氏は、家庭、職場・学校に続く、ボランティアは第3の自分の世界。自分の居場所であり、行き詰った時のヒントがある、課題と向き合う場所であると話す。

長田氏は、自分を大きく変化してくれたものであり、誰かのためにしているものではなく全部自分のためにしていた、つながり、自立性の育成だったと話す。

甲野氏は、ボランティアは自分の人生の主人公は自分、主体的に生きていく、誰かに与えられたものではなく、自分がというものがおけるもの、と話す。

ボランティア学習からつながった、それぞれの“今”を聞くことで、地域や社会とつながる、仲間に支えられる、自身の学びを深めるといった、ボランティアが若者に及ぼす学習の側面をあらためて認識できる分科会となった。

(日本ボランティア学習協会 高島弘行)

